

東京バッハ合唱団 月報

[第562号] 2009年4月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604
Tel：03-3290-5731 Fax：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.562
April 2009

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

東西の壁を打ち崩したバッハを ぜひ響かせてください

特別演奏会「J. S.バッハ 教会音楽の午後」

小海 基 (荻窪教会牧師)

この5月17日(日)に、第19回荻窪音楽祭の一環として東京バッハ合唱団のカンタータ演奏が私の牧する荻窪教会で催されることになりました。演目は夏のヨーロッパ公演と同じです。「荻窪音楽祭」の他の参加者たちも、伝統ある東京バッハ合唱団が参加するというのを強く意識して、前日の16日(土)に同じ荻窪教会礼拝堂を会場に行う室内楽の演目もオールバッハプログラムになりそうです。また5月は荻窪教会自体も「伝道月間」として外部の説教者を招いて伝道礼拝を行います。今回はバッハの研究者でもある京葉中部教会の村上茂樹牧師(H・ヴェアテマン著『神には栄光 人の心に喜び』J. S.バッハ その信仰と音楽』日本基督教団出版局、2006年刊の訳者)を招くことになりました。他にも5月3~5日に有楽町で開かれる「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン 2009「熱狂の日」音楽祭」も「バッハとヨーロッパ」がテーマです。この5月は私たちの教会もどっぴりとバッハ漬けになります。こんな年はめったにないでしょう。楽しみにしながらこの文章を書いています。

今からちょうど20年前の1989年という年は大変な一年でした。1月に天皇代替わりで日本国内が揺れ、4月から6月にかけてお隣の中国では天安門事件(6月4日が流血事件)が起こり、11月にはベルリンを東西に隔っていた壁が崩れ、12月22日にはルーマニアのチャウシェスク政権が崩壊しました。そしてこの年を境に東欧社会主義政権が次々と倒れていったのです。

かつて私が大学で歴史学を学んでいたころの時代区分では、1945年の第二次大戦後を「現代」としていたのですが、現在では1989年を境目の年にする研究者が増えていくそうです。振り返ってみれば、この大きな節目の前後でもJ・S・バッハの音楽は大きな役割を果たしていたのではないのでしょうか。

よく知られていることですが、1989年にいたる何年も前から、旧東ドイツのライプツィヒにある聖トーマス教会、ドレスデンの聖十字架教会といったバッハゆかりの教会で開かれていた夕べの祈禱会に、大勢の参加者が詰めかけ、西側に亡命するのではなく、壁を越えて平和的に社会を変えていこうと呼びかけ合い、それが最終的に

ベルリンの壁を崩す気運へと高まっていったという流れが生まれました。私もその集会に参加した若者たちから話を聞いたことがあります。旧東ドイツ政府は「成人式」という国家儀礼をわざわざ「堅信礼」の日とぶつけて、「成人式」に参加せず「堅信礼」のために教会の礼拝に出席する若者たちから大学受験資格を奪っていたということ、それにも関わらず教会に集う若者たちが次々と増

J. S.バッハ 教会音楽の午後

第19回荻窪音楽祭 参加

[日時] 5月17日(日) 15:00 開演

[会場] 荻窪教会(日本キリスト教団)(地図参照)

- ・カンタータ第8番(み神よ わが死はいつ)
- ・宗教歌曲集より(ソプラノ独唱)
BWV446、BWV507、BWV479
- ・カンタータ第131番(深みより 主よ われはなれを呼ぶ)
- ・ミサ曲抜粋
キリエ(BWV235/1)、グロリア(BWV235/2)、
サンクトゥス(BWV232/22)

[演奏] 光野孝子(ソプラノ独唱)

若松純子(フルート)、金澤亜希子(オルガン)

大村恵美子指揮・東京バッハ合唱団

[主催]「クラシック音楽を楽しむ街・荻窪」の会
荻窪教会

入場無料(ただし、席数に限りがありますので、お早めにご来場ください。14:30開場)



えていったことなどです。

そういう中で、聖トーマス教会合唱団や聖十字架合唱団が何回か来日してバッハの受難曲を演奏しました。来日のたびに、団員の若い亡命者が東京の西ドイツ大使館に駆け込んでいたのもニュースとして知らされました。今夜の演奏会はやけに緊張感に満ちた物だったなと思うと、翌日の新聞に若者の亡命の記事が出るということが繰り返されました。当時私よりも少し若いだけの高校生くらいの若者たちが、大学受験資格を棒に振ってまでキリスト者になるという人生の選択をするということにも驚かされましたし、何のつても無い西側社会に亡命者として渡って行って、果たしてうまくやっっていけるのだろうかと心配もしました。

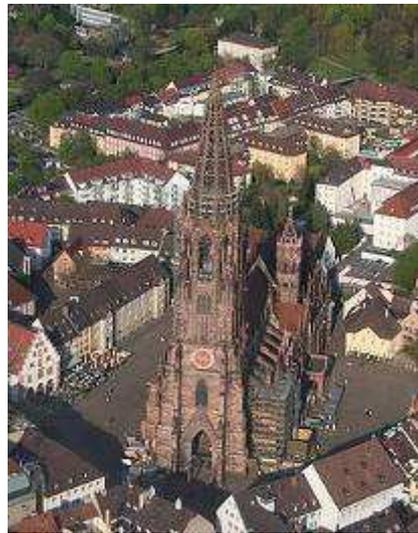
1989年11月9日、くしくもこの日付けはナチズム台頭の端緒となった「水晶の夜」の日でしたが、ベルリンの壁が崩され始めたとき、流血に走りそうになった軍や警察隊を、指揮者クルト・マズアや教会の人たちが身体をはって食い止めていたこともあとから知らされました。「教会よありがとう」という垂れ幕を手にした人たちの光景も、留学先のセントルイスのテレビで観ました。

あれから20年たって、これらの歴史の節目であった年の一連の出来事を振り返れば振り返るほど、バッハの音楽は、かつてのルター派正統主義時代（近代）のバッハというだけでなく、現代史の大きなうねりの只中であっても、何か大きな働きをなしていたということを思わずにいられません。確かにベルリンの壁が崩れ、東ドイツのホーネッカー政権が倒され、東西ドイツの統一がなったときに響いたのはベートーヴェンの第九交響曲でした。しかし本当は、バッハがふさわしかったのではないかと思うのです。舞台はバッハゆかりの教会で、バッハを歌いこんだ人たちが先頭になって、事は進んだのではなかったかと思うのです。

こんなことを記すのも、東京バッハ合唱団の3月号の月報（561号）の、大村恵美子先生の書かれた宮田光雄先生の新著『ホロコースト 以後 を生きる』への応答が感銘深かったからです。キリスト教とユダヤ教、さらにはイスラム教まで聖書宗教の対話が進み、これまでのキリスト教側の偏見が正されようとしている。今度のヨーロッパ演奏旅行では、まず、ストラスブール大聖堂に偏見に満ちて刻まれた「エクレスシア像」と「シナゴーグ像」を見学することから始めたい、という志が綴られていましたね。

そういうバッハの響き、現代史のうねりの中でも変わらずに鳴った響きを、ぜひ私たちの教会の礼拝堂で聴かせてもらいたいものだ、荻窪の街の人々とともに5月の公演を心待ちにしています。

東京バッハ合唱団の皆さん、東西の壁を打ち崩したバッハ、今も東西南北の偏見の壁を崩し続けているバッハを、ぜひ響かせてください。



フライブルク大聖堂
(ミュンスター)

<第5回ヨーロッパ演奏旅行>

3つの都市と主要教会（下）

フライブルクとストラスブールの大聖堂

大村 恵美子

フライブルクは、当合唱団の副指揮者・橋本眞行さんの率いる松山バッハ合唱団の本拠地、愛媛県松山市と姉妹都市の契約を交わしているご縁から、松山とフライブルクの両バッハ合唱団も、早くから交流をつづけてこられた。そのおかげで、私たちも両合唱団合同の演奏（2002年《口短調ミサ曲》、2007年《マタイ受難曲》）を、松山で聴くことができました。《マタイ》の際には、指揮者のポイアーレ氏が、東京バッハ合唱団の練習（東京・目白）にもいらして、親しくお教えいただくこともでき、松山での公演には有志が参加させていただきました。

シュトゥットガルトへの招聘演奏が決まったとき、さほど遠くないフライブルクにも、ぜひ訪れてご挨拶したいと考えました。夏休み中という不都合な時期にもかかわらず、ポイアーレ氏のご親切なおとりなしで、大聖堂でのミサ（8月9日）に音楽奉仕をさせていただくことになり、ほんとうに感謝しています。

フランス・スイスとの国境近く、ライン川沿いのフライブルク（人口22万）は、13世紀以来のロマネスク・ゴシック様式の大聖堂を中心に、1457年創立のフライブルク大学を擁する活発な文教都市として親しまれてきました。第二次大戦の戦禍もそれほど全面的ではなく、シュヴァルツヴァルト（「黒い森」）への入口につながる町並みは、昔ながらのひなびた面影を残し、どこを歩いても塔や城館などの楽しい旧跡や遺構が見られます。

こことシュトゥットガルトに共通なのは、音楽活動もたいへん多彩なことです。バロック関係だけでも、ポイアーレ氏率いるバッハ合唱団・同オーケストラとアントン・ウェーベルン合唱団のほか、バロックオーケストラ、大聖堂合唱団、室内合唱団、オラトリオ合唱団、シュツカントライなど、いくつもの高名な演奏団体がひしめいています。

ストラズブル大聖堂
(カテドラル)



「3つの都市と主要教会(上) シュトゥットガルト・シュティフト教会」は、月報第560号(2009年2月)に掲載しました。

さて、市のシンボルである大聖堂(Münster)ですが、これはストラズブルの大聖堂(Cathedral)と比べてみるとおもしろく、ほぼ同時期にできたこれら2つの建物の外観は、この地方に特有な、赤い砂岩のブロックでつくられ、聳え立つゴシック尖塔は、フライブルクのは116メートル、ストラズブルのは142メートル、ストラズブルのほうが大規模で、また彫刻などは、フライブルクのほうが愛らしく、民俗的、ストラズブルのほうは細長く繊細な感じがします(フランス・シャルトル大聖堂の厳しい精神性に通うものがある)。

フライブルク大聖堂は、後期ゴシック様式で1513年に完成。内陣の主祭壇、ギルドの紋章のならばステンドグラス等、暖かくほほえましい芸術品に満たされています。

一方、古くからヨーロッパ全土の交通の要衝として栄えたストラズブル(「街道の街」の意、人口27万)は、ドイツ・フランスの間、またカトリック・プロテスタントの間に交錯する歴史的な舞台として経過し、世界大戦にも、巧妙なかけひきにより破壊されずに生き残りました。今やヨーロッパ連合(EU)の根拠地の一つ、議会の所在地として、国際的な重要性をおび、文化的にも種々の国際イベントがたえず催されています。

この街もライン川沿いにありますが、そこから引き込まれた運河に取り囲まれ、高い尖塔をもつ大聖堂を中心に、政治・経済・文化・宗教、あらゆる面で活発な発信をしています。

宗教改革者カルヴァンが、ジュネーヴでプロテスタントの教会を確立する前に、根をすえた「改革教会」のほか、聖トーマ、聖ギヨーム、聖ポール等、むかし私が留学中に縁があったのはみんなプロテスタント教会でしたが、国際的に寛容な都市だけあって、カトリックやユダヤ教の人びともけっこう多く、大聖堂は中世以来のカトリックの司教座としての威厳を保ちつづけています。

昔この大学で学んだゲーテが、すっかり心を奪われたとおり、この大聖堂は、近づく、外壁をびっしりと飾るスマートな石像が、まるで、ランランと音楽を奏するように、見るものの心を躍らせ、中に入るとまた、色彩豊かで格調高いステンドグラス、天文時計、説教壇な

ど、どれをとっても、中世の人間の神への想いがひしひしと伝わるような作品に溢れています。

今回訪れる地は、素晴らしい歴史に富んだ都市ばかり。それをしっかり見て味わい、心に納められるよう、今から体調をととのえることが肝要です。

このほかに、宿泊したり、いくぶんでも地に足をつけて見ることができる予定地は、フランクフルト、コルマールとリックヴィル(フランス)、ローテンブルク、ハイデルベルク等、宝石のように魅力的な町ばかりです。なるべく出発前に、それぞれの訪問地の知識を得ておかれれば、後悔しないですむことでしょう。

大統領の替わったアメリカは、どうなる？

大村 恵美子

このところ、私は、夏目漱石の全集を読むのに時間を費やしていましたが、漱石のころの日本人が、アメリカをどのくらい意識していたのか。今年になってひきつづき、1月20日のオバマ大統領就任前後に、私の周囲でも、アメリカをめぐる、何人かの方々の言葉が伝わってきました。

渡邊利雄氏著『講義 アメリカ文学史[全3巻]』が出たとき(2007年12月刊)私はそれを月報でもご紹介し、政治・経済面からの、どちらかといえば批判的なアメリカ理解を、文学・芸術面から親しく識ることによって、彼らとの人間同士の連帯的友情もとりもどせるのではないかと、という希望的感想を述べました。

最近、史上最悪ともいわれるブッシュ大統領の退陣直後に、宮田光雄氏著『ホロコースト<以後>を生きる 宗教間対話と政治的紛争のはざままで』に接し(この論集は、以前からのものも含まれていて、宮田氏の先見性を証していますが、このたびのイスラエルのガザ侵攻という暴挙とタイミングの合った素晴らしい出版だと、私は思います。月報前号に紹介)さらに今、もうひとり、『講義 アメリカ文学史』を読まれた森井眞氏が、著者の渡邊氏に送られた感想文を読ませていただきました。

明治維新後の大変化を生きた夏目漱石、またその後を生き継いでこられた宮田氏、森井氏、渡邊氏らのアメリカ観だけをとり、われわれ日本人の人間形成のおもしろさが身近に感じられ、今後のアメリカとの成り行きにも思いを馳せるよいきっかけとなりました。当事者各位のお許しを得て、上述のお手紙を紹介させていただきます。

アメリカとぼく

森井 眞

大多数の日本人にとって、アメリカが自分にいちばん近い西洋の国になるのは、敗戦後ではなく、黒船以来でしょう。特にわが国のプロテスタントのキリスト教世界では、ルター派のドイツ、聖公会のイギリスを除けば、あとは圧倒的にアメリカの力が大きかったようです。ぼ

くの富山で通った幼稚園の園長さん、アームストロング夫人もアメリカ人、立派な人。教会の宣教師やキリスト教系学校の外国人教師もそう。西洋といえばアメリカ、と思ってほくも育ちました。本はあまり読みませんでした。

ところが、旧制高校にはいると、川口篤、片山敏彦、竹山道雄、堀大志……、教室や懇談会で話をきくのは仏・独・英の文学者、アメリカは皆無。哲学も、読んだのはドイツ観念論かパスカル、デカルト、モンテーニュ、スピノザ。米のプラグマティズムは軽蔑的。ぼくの接してきたアメリカという西洋にくらべ、欧州ははるかに深く広く面白いのです。

歴史を少しやり、米史の始まりのプリマスの植民地は、欧州（おもに英）から逃げてきて、神と天国のことで頭がいっぱいで、世界に新しい神の国を作ろうと祈っている立派なピューリタンの牧師・学者と、圧倒的多数の、旧世界で食いつぶし、なんとか新しい人生を始めようと、お金のこと・稼ぐことで頭がいっぱいの年期契約労働者（インデンチャード・サーヴァンツ）といったことを知る。両者のあいだの対話などありえず、後者は一方的に前者に従い、教会出席を強いられ、疑うな、立ち止まるな、怠けるな、ぐずぐずするな、迷うな、信ぜよ、まっしぐらに歩け、考えるな、地上の神の国を作るんだ……、とけしかけられて生きる、これで開拓に進み、生産性はあがる、自分たちの世界を拓げていく、先住民など、自分たちの前進の前にはいるものは、対話の相手ではなく、征服すべきもの。フロンティア・スピリット、西漸運動、とどまるどころなし。

プリマスなどピューリタンの植民地で、当時、旧世界から輸入していた書物はほとんどみな、神学と農業などの実用書のみ。「人間とは何か」と問うこと、それはキリスト教で答えが出てしまっているので、むしろ問うべきでない。問えば迷いや疑いが生じる。自分たちの信じる神の国が最上。それがアメリカン・ウェイ・オブ・リビング（ライフ）となり、民主主義とはそのこと。世界中にそれを拓げよう、となり、あのお説教好きのアメリカ人が生まれる。そんなアメリカの姿を、ぼくは好きではないのです。そのアメリカは、ブッシュで挫折しました。これからどうなるか。

文学はまた別だと思えます。

環境や状況がどうであれ、人間がそこで人間を見つめれば、新しいものが生まれます。欧州にもむろんいろいろ面倒がある。矛盾がある。広い、新しい世界であるアメリカに逃げてきたいいろいろな人が、その新しい世界で新しいものを作る。そんな刺激もあってアメリカ文学もきっと面白いのだと思えます。そのことを、ぼくは全然疑いません。（以下省略）

[筆者：東京バツハ合唱団団友。長年、明治学院大学仏文科で教鞭をとり（フランス宗教改革史）、1982～1990年同大学の学長を務めた。隠退後も平和運動家として発言をつづけている。1919年生まれ]

柳元 宏史（やなぎもと・ひろし）

連載：全部おすすめ 50 曲選!! <その 20>

カンタータ第 29 番 《み神に謝しまつらん》

今年度は合唱団にとって、ドイツ演奏旅行という大きなプロジェクトを控えている。フライブルク大聖堂では、日曜日のミサのためにバッハのミサ曲をいくつか歌う。《口短調ミサ曲》の サンクトゥス もその中に含まれていて、いまごろはその練習に取り組んでいる最中であろう。

バッハ自身が好んで再演を重ねた今回のカンタータは、表題となった合唱曲の旋律が、のちに畢生の大作《口短調ミサ曲》中に、重要な音楽として取り入れられるものである。もともとは、1731年のライプツィヒ市参事会員交替式で演奏されたもので、祝典音楽であった。

曲は、式典の開始を告げるトランペットの美しい＜シンフォニア＞で始まる。そして、いよいよ2曲目が上述の合唱曲で、《口短調ミサ曲》の グラツィアス と最終曲 ドナ・ノービス へと転用されたもの。聴く者を敬虔な面持ちにさせる荘厳な＜合唱フーガ＞である。いきなりバスによって歌い出され、声部を積み重ねながら次第にトランペットと合わさって、聴く者の心を神へ持ち上げさせるような構成となっている。

つづく＜テノール・アリア＞は伸びやかで、この都市が神の統治の下に置かれていることを感謝する内容が、聖書の言葉をとおして歌われる。第4曲＜バス・レチタティーヴォ＞は さちなるかな / 主はなおわれらの守り / み光は都の城に満ち / 皆を支えたもう と、神の祝福のうちに守られていることを淡々と語り、第5曲＜ソプラノ・アリア＞では 愛(め)でたまえ / 国おさめ導く君らを / 従うわれらを と神の愛を切々と願う。

神の愛へのこちら側の応答を、つづく＜アルト・レチタティーヴォと合唱＞では、なが市(まち)はなれを / 感謝もてほめ讃えん / 民はうたわん と告げ、そのまま＜アリア＞(第7曲)に流れ込んで、深みのあるアルトの声が ハレルヤ み力 / 尊きみ名にあれや と確信に満ちて歌う。終結の＜コラール＞で 主によりたのみ / ゆだねまつる と信仰の真髄が告白され、「いつまでも身も魂もそのようにあるように私たちは歌おう(口語私訳)」と、最後もラッパの音と共に曲を結んでいる。

曲は、ライプツィヒが神の祝福の内にあり、愛され、その応答として市民たちも、いつまでも愛を注ぐ神によりたのむことを誓う内容となっているのだが、演奏旅行を控えた合唱団にも、神の祝福が豊かにあり、守られて、すばらしい旅行となることを、私も個人的に祈っている。

(岡山・蕃山町教会伝道師、団友)

CD バツハ・カンタータ 50 曲選 [第 4 巻] に収録。S 光野孝子, A 佐々木まり子, T 佐々木正利, B 宇佐美桂一、大村恵美子指揮・東京バツハ合唱団 / 東京カンタータ室内管弦楽団 .Org 草間美也子 .1997 年録音(第 81 回定期演奏会、石橋メモリアルホール)
楽譜: 「50 曲選」No.9 (東京バツハ合唱団出版局刊)